

ものがたり

慈濟

コーラン経筆写本

百、千劫経て、器用な手で復元された





● 扉の言葉 文・證嚴法師 訳・濟運 撮影・黄筱哲

宗教的情操

宗教的情操を育めば、

社会で争いごとが起きなくなります。

純真で善良な心をしっかり守り、

志を同じくして奉仕するのです。

群衆に混じっても清らかな心が汚染されず、

着実に誠心誠意で歩みを進めましょう。

生命を尊重する心で以て、

仏教の為、衆生の為に尽くすのです。



慈濟日本サイト

目次

【編集者の言葉】

慈悲を力に変えよう

善耕／訳 4

【今月の特集】

慈悲のテクノロジー：イノベーションコンテスト

青年発明家よ！羽ばたけ

高雄外国語チーム日本語組／訳

8

【聞・思・修】

東京に旅する

済運／訳

24

【グローバル慈善】

砂漠で助けを求めるかすかな叫びに耳を傾ける

荳荳／訳

29

異国で安住するための就職と進学

葉美娥／訳

36

【命の贈り物】

息子の問いは意味深い

江愛寶／訳

56

【證嚴法師のお諭し】

仏法は心の惑いを解く

慈願&心榮／訳

62

【特別報道】

時を経て受け継がれ 器用な手で蘇る

コーラン経筆写本

済運／訳

68

【行脚の軌跡】

批判を警鐘と受け止める

済運／訳

92

四月の出来事

済運／訳

98

台湾
花蓮
地震
0403
15日

表紙



胡光中さんは、大切に所蔵していたコーラン経筆写本を證嚴法師に寄贈した。検証の結果、紀元15世紀から16世紀に、10人以上の人の手によって書き写されたものと判明した。紙が変色して脆くなっていたページには血痕や水シミ、カビ、虫食い跡、焦げ跡まで残っていた。修復士は細心の注意を払って修復し、2年余りを費やして、本来に近い状態に戻した。

慈悲を力に変えよう

春節前の二月六日、衛生福利部（以下衛福部）は医学センター評価結果を公表し、台北慈濟病院が準医学センターから正式に医学センターに昇格した。台北慈濟病院の趙有誠（ジャオ・ヨウチョン）院長は、病院が一丸となって、より充実した医療を提供して患者さんに向き合い、恵まれない人々や独居高齢者などのケアに取り組んでいくことを囑望した。

慈濟は台湾全土で八病院を運営しているが、都市部か地方かを問わず、また医療事業による損益にとらわれず、非営利の財団法人医療機構として、證嚴法師が一九八〇年代に病院を創設した時の初心を受

け継ぎ、病気で苦しんでいる人たちに対する抜苦与樂を目的とする宗旨を貫き通している。

春節の間、花蓮の静思精舎は新年の雰囲気に満ち、国内外からのボランティアが、法師や精舎の常住師父たちと共に新年を祝うために滞在した。また、除夕（春節の前日）の前の晩から旧正月九日まで、世界各地のボランティアとも毎日オンラインで新年の挨拶を交わした。生中継で、カンボジアからはゴミ山の村民や子どもたちの変化、アフリカ・モザンビークの大愛村からは村民の感謝の言葉、ジンバブエからは井戸掘りが公衆衛生に与えた影響など、さまざまな慈善活動の映像が寄せられ、実りある成果を上げたボランティアたちは、晴れやかな表情を見せていた。

パキスタン人ボランティアのアモス・ダニエルさんは、三十五カ国から逃れて来た難民を支援した慈済タイ支部の施療センターに対し、感謝の意を表した。文化の違いと医療資源が限られている状況の中では、差し迫った医療を受けられないことはよくあるが、あらゆる困難を乗り越えて困っている人々の苦しみを和らげてくれる慈済ボランティアに、感謝の気持ちが芽生えたのだ。患者一人ひとりの笑顔、支援を受けた全ての家庭が抱いた感動、そして医療従事者のたゆまぬ努力、それら全てによって慈悲の心は人を変える力へと変わっていったのである。「愛が集まれば、たとえ小さな善行でも、誰かの人生に大きな影響を与えることができることを、施療を受けた人々が証明しています」。

今月号の特別報道では、「慈悲 VS. テクノロジー」をテーマに、今回で七回目となる「全国慈悲のテクノロジ・イノベーションコンテスト」

に焦点を当てている。それは、環境保護を念頭に置き、創意、工夫を凝らしたデザインを慈善支援や長期医療介護に活用することを、若い学生に奨励するものである。

長年にわたり、慈済は様々な分野の専門家と協力して、テクノロジーを医療と慈善、更には宗教の弘法に応用してきた。法師は「必ずしも奥深くて複雑な科学の研究開発ばかりが必要ではないのです。ごくありふれたものですが、人々にとって非常に役立つものもあります。このような研究開発こそが真の学問です」と強調した。

科学が進歩をもたらし、AI（人工知能）の発展が人々の生活を変えつつあるが、人文的な思いやりと統合されてこそ、テクノロジーは価値があるのだ。慈悲が力に変わる時、それらも環境に優しく、人々に利益をもたらす持続可能な解決策になるだろう。（慈済月刊六八八期より）

青年發明家よ！ 羽ばたけ

【今月の特集】

慈悲のテクノロジー イノベーションコンテスト

文・葉子豪 訳・高雄外国語チーム日本語組



(撮影・游澹紘、劉偉興)

「慈悲のテクノロジー・イノベーションシヨコンテスト」が始まって七年間、四十七項目もの発明が業界による選考を経て受賞し、既に商品化の段階に入っているものもある。社会への関心と創意が企業の伴走支援を得て次第に形となり、青年発明家が「殻を破って飛び出し」ている。世界を変える彼らは、□先だけの人ではない。

応

募作「ウミガメ防護カバー」の前で、国立台北教育大学の学生・薛凱潔（シユエ・カイジエ）さんが、審査員に開発理念を説明した。

「地球温暖化によってウミガメが棲息する砂浜の温度が高くなり過ぎている

ため、生まれてくる子ガメはメスが多く、オスが少ないという状況になっていきますが、子ガメの九割がメスという異常事態さえ発生しています。何とかしなければ、絶滅してしまう恐れがあります……」。

卓上には逆さまにした鍋のような形の防護カバーが置かれてあった。サトウキビの絞りかすとケルプなどの天然素材を圧縮して作られたもので、日光は遮るが、通気性がよく、砂浜を適切な温度に保つことができる。カバーの上部にはウミガメの卵の位置を示す掲示板が立っており、足元には、殻を破って出てきた子ガメが海に向かって這って行けるよう、複数の出口が設けられている。

「世界にはあなたのような人材は多くないでしょうが、ウミガメに関心を寄せる人は多いはず。このアイデアにはどれくらい独自の独自性がありますか」。

プレゼンテーションが終ると、審査員が登場した。台北慈濟病院の趙有誠（ジャオ・ユウツン）院長を皮切りに、続けて工業技術研究院の蔡禎輝（ツァイ・ジンフウエイ）所長、デザイン業界の達人・伍志翔（ウー・ツーシャン）ディレクターも質問した。

「サトウキビの絞りかすによるカーボンフットプリントはどれくらいですか。廃棄物を利用して、逆に他の部分でCO2排出量が増えることはありませんか」

「他に似たような解決手段は存在しませんか。このアイデアがより優れている点はどこでしょうか」



慈悲のテクノロジー・イノベーションコンテストの審査員団は、「汲水人」開発チームの説明を聞き、質問を發した。(撮影・劉偉興)

立て続けの質問によって、応募者はその場での対応能力と課題に対する熟練度を試された。

百件の応募作品のうち、「大学の部」から十六組、「高校の部」から八組の優秀作品を選出し、緊張感にあふれる質

疑応答の後、上位三名、佳作、「一番人気賞」、「企業特別賞」などが次々に発表された。入賞作品には、既に完成品となっているものもあれば、未だ構想段階だが、高いポテンシャルを持ち、今後の進展が期待されるものもある。

また、学びと成長という角度から見れば、「知恵を絞る」過程を経て、実践から学んだ応募者たちは、順位に関わらず全員が勝者だと言える。

競争を避けてはいけ ない アイデアを行動に移そう

この「慈悲のテクノロジー・イノベーションコンテスト」は、若い学生のアイデアが社会を利するエネルギーになるよう、二〇一七年から慈済基金会と慈済科技大学が合同で実施している。応募チームは、一回目は四十組余りだっ

たが、二〇二三年の第七回では百二十組余りが競合した。ここからも分かるように、今でも諸々の困難に直面しても、競争を避けたいと思わない人は多く、世界を変えたいという夢を持って、それを行動に移しているのだ。

応募者は大きく慈善と医療の二つの分野で創造力を発揮している。慈善活動に興味があるチームは、防災や災害への備え、災害支援などからアプローチしたり、社会福祉に着想を得たりして、へき地に暮らす立場の弱い人々の生活を改善し、持続可能な地域社会や環境づくりを促進する作品をデザイン

している。また、医療介護に関心を持つチームは、お年寄りや病人、障害者などの支援や介護方面で工夫を凝らしたり、医療従事者の労働環境の改善や

患者の安全と福祉の向上に役立つ作品を開発したりしている。

応募作品は、環境五R、「リデュース・リデュース・リユース・リペア・リサイ

慈悲のテクノロジーに 力を注ぐ

- 慈済はそれぞれ、生産、教育、研究部門と連携して、「慈悲のテクノロジー」の発展を進めており、これまでにポータブル浄水装置、キッチンカー、エコ毛布などの災害支援用装備や物資を開発しています。
- 2017年から「FUN広い視野で未来を想像する」青年イノベーション推進プロジェクトを進めており、「慈悲のテクノロジー・イノベーションコンテスト」と「青年公益実践計画」なども含まれています。



「慈悲のテクノロジー・イノベーションコンテスト」
参加方法と過去の受賞作

クル」のうち、少なくとも二項目を満たさなければならぬ。「多くの製品は、開発する時、ひいては量産時に大量の資源を消耗し、大規模な汚染を引き起こしています。ですから、構想のスタート時点から環境に配慮するように求めています」と慈済科技大学の羅文瑞（ロー・ウエンルエイ）校長が説明した。

昨年度のコンテストでは、五月一日の応募から十一月十八日の決勝と授賞式までに、計百二十組余りが参加し、そのうちの二十四組が決勝に進んだ。審査員の質問に対応するため、各チームともしっかりと「即答」の準備をして

好成绩と賞金の獲得を目指した。

審査員は実用性、使いやすさ、価格の手頃さ、市場受容性、応用しやすさなどの面から製品の総合的な完成度を評価すると共に、各チームにアドバイスや課題などを与えた。台北慈済病院の趙院長は、次のように述べた。

「コンテストである以上、勝ち負けはあります。例えば、恰幅の良さを競えば私の勝ちですが、若さを競えば君たちの勝ちです。発表された順位が自分たちの想像と開きがあっても、それは見方の違いでしかありません。ビジネスの視点で審査する大会もあるでしょう

が、今日は慈悲という出発点や社会的弱者や地球への配慮を重視しました」。

趙院長は、皆の創造力がすでに芽吹いていることを高く評価し、

「君たちの周りにいる若者が、未来のビル・ゲイツになるかもしれません。いつか君たちが経済的に成功した時も、人を助けたいという初心を忘れないでいて欲しい」というメッセージを送った。

「汲水人」

前を行く人が後ろの人を導く

決勝に進出した慈済科技大学「汲水

人」開発チームは、一年半もの努力の末に、電力の要らない慈悲の浄水装置を開発した。メンバーの一人で看護師の蔣怡慧（ジャン・イーフェイ）さんはこう語った。

「アフリカや発展途上国で安全な飲み水が不足している報道を見て、電力供給もあまり安定していない地域で使える、手動加圧式浄水器を思いつきました。開発中は何度も失敗しましたが、その度に益々やる気が出てきたので、目標が明確なら、努力する価値はあると思います」。

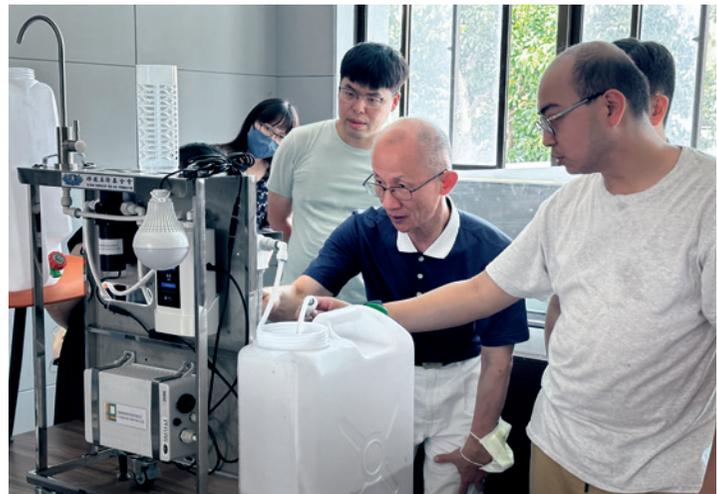
ろ過器はホースやペットボトル、古着



慈济科技大学の「汲水人」チームが開発した電力不要の浄水装置は、緊急時に飲料水を提供することができる。(撮影・劉偉興)

など身近にある材料で作ることができ、水をろ過した後、古着を取り外して洗えば繰り返し使えるのだ。最高水準のリユースを達成している点として、電力を使わず、経済的でコンパクト、洗えるフィルター、部品交換と消耗品の入手の容易さ、環境配慮などが挙げられる。彼らがこのような製品でコンテストに応募したのと同じ時期に、慈济基金会は既に十月上旬の台風14号によって甚大

な被害を受けた蘭嶼に、浄水装置を届けた。蘭嶼の住民は、途切れることなく浄水を手に入れることができた。慈济基金会防災チームリーダーの呂学正（リュウ・シウエツン）さんによると、蘭嶼に送った「UV-LED殺菌浄水システム」の前身は、慈济と工研院（工業技術研究院）が共同開発し、二〇一八年、ラオスの洪水被害を支援した時に使われた「高機動性省エネ浄水モジュール」だ



という。その装置は四組のろ過器から成り立っており、一日に二トンの水をろ過することができた。各ろ過器のタンクは大型スーツケースに入るサイズで、救援人員が携帯して飛行機やバスで運ぶことができ、別途輸送を手配する必要がなかった。

二〇二三年三月、工研院は慈済の要望に応じて、改良型の浄水装置を開発し、慈済は長期にわたり浄水装置に重点を置いてきた。2023年10月の台風14号により深刻な被害を受けた蘭嶼では、安全な飲み水が不足したため、慈済基金会は2組のUVCLED浄水装置を調達し、富岡漁港から被災地に運んだ。(写真上 提供・劉秋伶、写真左 撮影・陳信安)

た。タンクは二十八インチのストッカーより少し大きいだけで、ろ過性能は一日三トン以上に向上した。

「この装置には三つのフィルターが付いています。まず一つ目と二つ目のフィルターで不純物を取り除き、三つ目のUFフィルムで細菌の大部分をろ過し、最後にLEDで紫外線を照射して残った細菌やウイルスを死滅させます。この装置を通した水はそのまま飲めますよ」と呂さんは胸を張った。

この例が示しているように、慈善災害支援を行う場合には、「慈悲のテクノロジ―」装置で厳しさを増し続ける災害に対応し、さまざまなニーズに応える

ため、日進月歩で努力し続けなければならない。

新しいアイデアで 苦しむ人々を助ける

雲林科技大学のチームを指導する潘志龍（パン・ツーロン）教授によると、今の教育は学術と実用の差を縮めることを重視しており、学生たちの努力が全国的、更には国際的なコンテストでノミネートや入賞が叶えば、その経験は進学や就職にもかなり役にたつ、という。

また、羅校長はこう語る。

「学生チームは、資金、設備、技術など各方面においては、充実したリソースを持つ企業とは比べ物になりません。彼らの作品や概念が未熟なのは致し方ないことです。それでも皆がイノベーションに取り組みよう励ましました」。さらに、慈済基金会の劉効成（リュウ・シアオツン）副CEOも、「イノベーションとは、必ずしも新しい物事を発明しなければならないのではなく、今ある技術を衆生のニーズや慈悲、善念と共に、それを応用してより大きな善の影響力を生み出すことなのです」と付け加えた。

安楽を与えること」である。慈悲のテクノロジ―開発の重点は、苦しんでいる人の助けになること、そして、大地に生きる衆生に優しく、害をもたらすことなく、更にはすでに著しく破壊されている地球環境の助力になること、である。利他の心によるイノベーション開発の余地は、実は無限に広がっているのである。慈済は、熱意と創意にあふれる若者たちが、この「善の競争」というコンテストに参加することで、世を救い、衆生を利するために、愛と智慧を奉仕し続けてほしい、と呼びかけている。（一部資料 提供・呉珍香）

慈悲とは「拔苦与楽（苦しみを除いて、

（慈済月刊六八八期より）

東京に旅する

炊き出しの食事をお盆に乗せてホームレスたちに差し出した。

一人ひとりにお辞儀するのは、

「三輪体空」を相手が教えてくれていることへの感謝の表しである。

次々にコインを布施する姿を見て分かった。

この人たちは皆、手のひらを下に向ける菩薩なのだ。

家

族旅行中だったが、暫し家族から離れて慈済の制服を身につけ、東

日だった。毎月二回行われており、既に十四年目に入った。

京支部の旧知の法縁者と合流した。その日は、ボランティアが定期的に代々木公園でホームレスのために炊き出しをする

配付時間前だというのに、既に六十人ほどのホームレスが列を作り、静かに待っていた。彼らは一般の通行人と何ら変わ

りはなく、髪の毛も服装も清潔に整えられていたが、僅かに人生の浮き沈みを経験してきたことで、少し自信に欠けた顔をしていた。昨夜、渋谷駅近くで、毛布を被って路上で寝ていたホームレスたちのことを思い出した。今ここに並んでいる人の中にその人たちはいるのだろうか。

ティアの人数が多くなかったのは、一人の人が能登半島地震の被災地に行っていたからだ。留守番しているメンバーは、少ないながらもいつものこの活動を引き受け、ホームレスたちに温かい食事を提供した。

代々木公園に入ると、大きな木々は葉がすっかり落ち、何もつけていない枝が伸びているだけで、冬空に寒さを添えていた。ボランティアたちは素早く会場の準備に取り掛かり、テーブルを組み立てて、電気釜と食器類を乗せ、木の枝とテーブル前に慈済の旗を掲げた。ボラン

食事が提供される前、ボランティアは整列してホームレスたちと向き合い、黄韻璇（フウオン・ユンシェン）師姐がマイクを持って、流暢な日本語で、「慈済の炊き出し会場にお越しになり、辛抱強くお待ちいただき、ありがとうございます。今日のメニューは、五目丼と体が温まる生姜スープです。一月に入って寒く

なりましたが、皆さん風邪を引かないよう、お身体にお気をつけください」と挨拶した。

また、「今年は新年早々から天災が起き、慈済支部のボランティアは石川県穴水町の避難所と病院で、きちんとした食事ができなかつた住民と病院スタッフの方々に、温かい食事を提供しています。『ありがとう』と言って笑顔を見せてくれると、ボランティアもとても幸せな気分になります。一円でも百円でも、皆さんの心遣いが集まれば、私たちの心強い後ろ盾となるでしょう。あなた方の気持ちは、きつと被災者に届きます！」と言った。



ボランティアたちが深々とお辞儀すると、音楽が鳴り出し、皆で日本語版の「祈り」を歌った。私は目を閉じて耳で聞き、その時の状況を感じ取った。風の音、車の音、梢に止まっている鳥の囀り等々さまざまだったが、それらは次第に聞こえなくなり、心から祈る歌声だけが残って、広い代々木公園の中をこだました。また、吸い込むのは冷たい空気なのだが、なぜか温かく、潤いがあるように感じられた。ああ、それは感動のあまり涙が込み上げてきたからかもしれない。

祈りが終わると、数人のホームレスが積極的に「愛を募る箱（募金箱）」にお

金を入れた。そのうちの一人は、おもむろにリュックからビニール袋を取り出し、その中の封筒を取り出して、そこに入っていた硬貨を何枚か箱に入れた。それらは大事に、何重にも包まれてしまわれていたが、その瞬間に気前よい布施に変わったのだ。彼らはもう街角で蹲っているホームレスではなく、光り輝く宝石のように心が富んだ人たちなのである。

熱々の白いご飯に香ばしい五目野菜のあんがかかっている、食欲を誘った。私

●代々木公園の炊き出しで、能登半島地震の被災者を支援するために、ホームレスたちが次々とお金を募金箱に入れた。

はお盆で提供する役目で、「どうぞ」と一言しか話せなくても、深くお辞儀して、私たちに奉仕の機会を与えてくれる相手に感謝する、という配付活動の重点はしっかり覚えていた。

お辞儀をする私には、ホームレスたちのボロボロで汚い靴しか目に入らなかつたが、彼らは皆、未来仏であり、配付を通して「三輪体空」^⑨とはどういうことを私たちに教えてくれているのだ。それは、自分が助ける人間、或いは助けを必要としている人間が誰かなどにとられることなく、自分がどれだけの事を成して来たのかも気にしないということな

のである。私は最も尊敬を表す動作でもって、彼らの教えに感謝する気持ちでお辞儀をした。

この広い世界には、いつもどこかで苦難に喘ぐ人がいる。幸いなことに慈済ボランティアがいて、微かに光る力を發揮することで織りなした大愛ネットで彼らを優しく受け止めている。心の中にある愛が啓発された時、手のひらを下にして向きを変えるだけで菩薩になることができるのだ。（慈済月刊六八九期より）

^⑨布施行を实践する時の理想的なあり方：施者、受者、施物の三者に固執観念のないこと。

グローバル慈善・ヨルダン

文・林縁卿（ヨルダン慈済ボランティア） 訳・萱萱

シリア難民への医療支援

砂漠で助けを求めるかすかな叫びに

耳を傾ける

「助かる方法がなくても、気にしないでください。

最期が来れば、解脱しますから」。

ボランティアたちは、

ナワフさんが支援を得られないのを見て忍びなく思い、

彼の治療の機会を求めて奔走した。

手術後、ナワフさんは、杖をついてやって来た。

三十分歩いてでも、ボランティアに感謝の言葉を伝えたかったのだ。



●ナワフさん（右から2人目）一家12人は、数年前からテント生活をしている。2023年9月、慈済ボランティアのルースさん（右から一人目）と彼のチームが訪問ケアをして、一歩踏み込んだ医療支援を提供した。（撮影・ファユミ）

シリア・イドリブ県出身のナワフ・モハメド・アルファレスさんは、二〇一一年のシリア内戦以前は農作業に従事してあちこちで働き、生活に余裕はなかったが、貧しいなりに満足した生活をしてきた。

二〇一三年、ナワフさんと長男のラカン・ナワフ・アルファレスさんらは戦火を逃れてヨルダンに渡り、二世帯十二人がマフラク州フウェイジャ村近くでころうじて雨風をしのいでテント住まいを始めた。夏の炎天下、冬の寒風、時には

砂漠から砂や小石が飛ばされて来て舞い上がる。そして、病気が劣悪な生活環境に拍車をかけた。臨時雇いの収入は少なく、生活費を支出すると、病気を治す余裕はない。六十七歳のナワフさんは、そんな絶望的な状況にあった。

蓄尿袋を引きずって生計を立てる

二〇〇三年五月下旬、慈済ボランティアとヨルダン慈済人医会は予定通りマフラクで施療活動を行った。ナワフさんは杖をつき、蓄尿袋を手下げ、よろよろと歩いてやってきた。彼は十年前から膀胱

胱に腫瘍があり、ヘルニアと前立腺肥大の症状を抱えていた。

モハナド医師のクリニクには、息子さんが付き添って来た。症状は複雑で、ボランティアは先ず、六月にアンマンでヘルニアの手術をする手筈を整えた。しかし、八月になると膀胱の腫瘍が悪化し、尿が溢れ出て非常に痛みを伴うようになったため、息子さんは彼をアンマンの公立病院に連れて行ったが、手術の予約は六カ月後、費用も三千ディナール（約六十二万円）掛かるとのことだった。にっちもさっちも行かない一家に、どうしてこのようなお金が払えるというの

だろう。息子さんは、仕方なく五百ディナールを人から借りてカテーテルを取り付けることしかできず、それ以上の治療を受けることはできなかった。病状は悪化の一途をたどった。カテーテルも腫瘍に圧迫されて絶えず腹腔に痛みを感じ、憔悴し切ってベッドに横たわり、病魔に身を任せていた。

二〇二三年九月、慈済ボランティアが訪ねた時、ナワフさんはルースさんに力なく話しかけた。「もし助かる方法がな

●手術を受けて間もないナワフさんは、慈済チームが再度フウェイジャ村に来たことを知って、ボランティアのルースさんに会いに来た。（撮影・林緑卿）



いのなら、気にしないでください」。一家はなす術もなく、絶望の中で運命を天に任せるしかないことをボランティアに告げた。「命が行き着く先は、解脱なのですから」。

悲しみでいっぱいになったルースさんは、地元の泌尿器科のバハア医師を訪ね、慈済がヨルダンで既に十四年間も医療支援をしていること、支援している対象はほとんど面識のない、医療費を払えない難民や貧しい人々であること、そしてその善意のお金は全て世界中の愛の心から来たものであることを伝え、人助けの善行に参加してほしい

とお願ひした。

四十歳のバハア医師は、手術費を二千ディナール安くすることにした。二〇二三年十月、アンマンのキンディ病院で、ナワフさんは膀胱腫瘍の摘出手術を受けた。その時、前立腺は肥大していないことが判明したため、更に五百ディナール安くになった。

ナワフさんはようやく十年間の痛みから解放され、一日中蓄尿袋を持ち歩く必要もなくなった。回復室から移動ベッドで出てきた時、彼は「證嚴法師、ありがとうございます。ありがとうございます、慈済」と言い続けた。彼にとって、慈済

は、絶望の淵から救い出してくれた命の恩人なのだ。

新たに生きるという喜びを 目の当たりにして

慈済ボランティアは、偶数月には必ずマフラク難民キャンプへ見舞いに来る。二〇二三年十月、慈済ボランティアがフウェイジャ村に来ると聞いて、ナワフさんは、三十分かけて歩いてボランティアに会いに来た。

ナワフさんは目を輝かせ、證嚴法師、慈済、台湾の人々、そして全てのボラン

ティアに感謝した。彼の喜びを受け取ったルースさんは、言葉にならないほど感動した。「彼は寄り添う過程で、希望の到来を見たのです。喉が渴いて死にかけている人に水を与えたら、生き返ることと同じです」と言った。

「慈済は私の長年の病気を治してくれました。善意ある皆さんが、健康でありますように。アッラーが平和と無事を祝福してくれることを祈っています！」と言った。ナワフさんの心からの感謝の気持ちが伝わってきて、感慨深いものがあつた。無私の愛は、生きる希望を取り戻させてくれるのだ！

異国で安住するための 就職と進学

文・張淑兒、陳樹微、陳惠如、アナスタシア、
朱秀蓮（慈済ボランティア） 訳・葉美娥



● 7月29日、ルブリンカリタス修道会礼拝堂で、ポーランド語コースを修了した79人のウクライナ人学生に、EU認定の修業証明書が授与された。（撮影・セルシ）

戦争が終わる日まで、ポーランドに身を寄せているウクライナ人には、生きていく自信と尊厳が必要なのだ。

語学コースは社会に溶け込むのに役立つ、再び新たな自由を味わうことができる。

医療用ポーランド語コースは、医療従事者がライセンスを取得し、自分の専門知識を活かしてより多くの患者を助けることに役立つ。

□

シアとウクライナの戦争は二十カ月も続いている。ウクライナ人の若者や中年男性は国を守るために残っているが、命を守るために逃れた老人や子供、女性は異国で厳しい生活を送っている。いつ家族と再会できるのか、見通しは立っていない。

ウクライナ人の英語教師であるハンナさんは、ポーランドで避難生活をする間に、新たに語学ライセンスを取得した。「私は外国語の教師ですから、見知らぬ土地で現地の言葉を理解することの重要性がよく分かっています。それは現地で自在に生活するための第一歩なのです。

しかし、話せることと、語学ライセンスを持つていることとは違います。特に就職のための履歴書にEU認証の証明書を添付すれば、即戦力としての能力を最も強力で証明することになります」。

慈済基金会は、ポーランドのルブリンにあるカリタス基金会と協力して、ウクライナから避難している人たちにポーランド語を教え、地元社会に溶け込む機会を与えている。慈済は今年初めから七月末まで、七十九人にコースの修了証を授与した。

この修了証を軽んじてはなりませんよ、とドイツ在住のボランティア陳淑女

(ツン・スウニウ)さんは、その実用的な価値についてこう語った。「これはEU統一語学認証資格コースです。A1、A2、B1、B2、からC1、C2のレベルに分けられていて、1点から5点の成績で計算します。この修了証書さえあれば、ヨーロッパ全土で言語能力のレベルが判別でき、人との会話交流ができるだけなのか、聞き取りと読み書きに何の障害もないレベルなのかを証明してくれるのです」。また、ポーランドでの就職に役立つだけでなく、二十六歳以下で語学力B2レベルがあれば、国籍を問わず小学校から大学まで無料で就学がで

慈済がポーランドで ウクライナ避難民を支援

緊急支援期間

- ・ 2022年2月に戦争が勃発し、慈済は3月から他国に逃れたウクライナ人たちに支援の手を差し伸べた。国際赤十字社、国連児童基金、カトリックサレジオ会、カリタス基金会、カミリアン修道会、ポーランド婦女基金会、ワールドホープ、イスラエイドなど11のNGOと連携し、様々な支援を提供した。
- ・ 統計によると、一年余りで1200万人以上のウクライナ人がポーランドに避難し、そこを離れた人も1000万人に上った。この緊急時に、慈済は購買カードやデビットカードを配付し、4カ月にわたって中長期ケアを提供した。



中長期の支援

- ・ 首都ワルシャワ、ルブリン、シュチェチン、ポズナン、オポーレではヨーロッパ各地の慈済ボランティアが支援にあたった。
- ・ 支援には、物資の配付、生活支援、ポーランド語コース・成人向け職業訓練コース開設、学童保育クラス、歯科の施療などが含まれる。

きるのだ。

ウクライナとポーランドの言語は似ており、コミュニケーションが可能な部分もあるが、文法を学ぶ場合には困難が伴う。このコースはルブリンのカトリック大学で開かれている。アレクサンドラ先生のクラスは学生の数が多く、彼女は、コースを修了するのは簡単ではないと言う。彼らは仕事と勉強、そして家庭での責任の間でバランスをとらなければならぬからだ。

先生たちはポーランド語を教えるだけでなく、様々な生活情報を共有し、一部の学生の本来にも注目しながら、可能な

就職先やマーケティングの紹介も行う。

現地の言葉ができれば、確かに安心できる。高齢者にとっても、再雇用は叶わなくても、ポーランド語が少しずつ理解できるようになれば、一人で買物に出かけ、誰かと会話することもできるようになり、疎外感を感じることも減る。

マグダレナ先生は、レベルB1の学生たちを誇りに思っている。「彼らは最も進歩が速く、中にはすでに職に就き、或いは大学入学の資格を得た学生もいます。これは、慈済の支援が個人の就職や就学の面で、功を奏していることを証明しています」。

留まるべきか否か
どちらも困難がつきまとう

ウクライナの隣国ポーランドは、戦争初期に避難民を最も多く受け入れた国である。政府機関と国内外の慈善団体は先ず、彼らが落ち着いて生活できるような支援を行った。ポーランド南西部オポーレ県の大都市オポーレを例に挙げると、社会局の付属機関である「社会活動センター」は全方位的な支援を提供し、戦争前からオポーレに住んでいたウクライナ人によって、戦火を逃れてきた同胞を受け入れ、そこから社会局が雇用支援を

む支援を引き継いだ。

母親が仕事に出かけるため、夏休みの間、世話してくれる人がいない子供のことを考慮して、オポーレ市社会局は月曜日から金曜日の毎日午前八時から午後三時まで、学童保育を提供している。ここではポーランド人とウクライナ人の子供が一緒に絵を描いたり、遊戯や読書をしたりして交流を深めている。

戦争勃発後、赤十字オポーレ県支部は、緊急事態を乗り切るため、ほぼ毎日避難民に物資を配付していたが、今では日常必需品の寄贈が日毎に減っているため、配付は一カ月十二回に調整され、対象は

高齢者と三人以上の子どもがいる母親または身体障害者に限定された。

オポーレの慈済ボランティア陳恵如（ツン・フェイルー）さんとラドスロー・アトラスさん夫妻は、昨年六月と七月にオポーレ体育館で大規模な寄付イベントを何回も行い、買い物カード、毛布を配付した。また、十二月からはオポーレ大学と協力してポーランド語と職業訓練コースを開設し、避難民の雇用機会を増やす手伝いをしている。

当初、語学コースは、三百人で二十クラスを開設する計画だったが、申し込み者が四百人を超えたため、最終的に

三百五十人として、八人のオポーレ大学の教師が指導を受け持った。また、一部の避難民の差し迫った要望に応え、集中クラスも開設した。特別なのは、大学のキャンパスではなく、教室を分散して行うようにしたことだ。主に彼らの居住地に合わせて、近隣の高校や小学校、或いは文化センターなどに協力を仰ぎ、教室を提供してもらった。戦争によるヨーロッパのエネルギー価格の高騰で、暖房費や電気代が大幅に値上がりしたため、集中授業は人数を多く受け入れられるビジネスホテルで行われた。

しかし、誰もが終業式まで授業を受け



●ルプリンで高齢者への定期的な食糧配付の時、ボランティアたちは「皆家族」という慈済の歌を手話と共に歌い、支援と寄り添いの雰囲気增添了。(撮影・セルシ)

続けられるわけではない。彼らは留まるべきかどうかで迷うことがよくあるからだ。長期滞在するのなら、ポーランド語を学ぶことは不可欠だ。しかし、近い将来帰国できるとしたらどうだろう？何度も自問自答を繰り返し、次のステップを決めるのが実に難しい。ボランティアたちも彼らの心情がよく理解できるので、手伝えることは積極的にやっている。

ウクライナ人医師の合法的な就業

二〇二二年末、ポーランド政府は或る

重要政策を発表した。ウクライナ籍の医師がポーランドでライセンスを取得し、五年間合法的に医療行為を行うことができるようにしたのだ。この政策は、ポーランドの医療人員不足の問題を解決しただけでなく、ウクライナ籍医師に就業機会を与え、彼らの生活がより安定するようになった。

この政策が発表されると、ポズナンの慈済ボランティアであるルカシユさんと張淑兒（ジャン・スウール）さん夫妻は、ウクライナ人医師も医療用ポーランド語の習得が必要になる、と直ちに察知

した。なぜなら、その特殊な政策には前提条件があったからだ。つまり、ここで医療に従事するには、基本的な医学知識のほかに流暢なポーランド語を話せなければならず、患者と十分にコミュニケーションをとることが必須とされているからである。

ルカシユさん夫妻は素早くポーランドで第三位のアダム・ミツキェヴィチ大学（以下UAM）と提携して、ウクライナ人医師に医療用ポーランド語コースを提供することにした。

UAMには百年以上の歴史があり、

ポーランドのロマン派詩人アダム・ミツキェヴィチにちなんで名付けられた。外国語教育と研究で有名な大学で、ポーランドの外国語大学と称されている。慈済はその前の二〇二二年八月からポズナンで、避難生活を送る人向けに無料のポーランド語コースの提供を始めていた。今年は更に二つの医療用ポーランド語コースを増設した。学生には八十%以上の出席と、ポーランドの医療制度と法律を深く理解することが求められる。厳しい試験を経て初めて、UAMと慈済基金会が共同で発行する修業証明書を手



にすることができたのだ。

五十人の学生がそのコースに参加し、今年八月に卒業した。そのうちの二十三人が政府や病院の医療用ポーランド語試験に合格し、ポーランドの医師ライセンスを取得することができた。彼らは自分の専門知識を発揮できるようになっただけでなく、家族と共にポーランドで合法的に収入を得て自立した生活ができるようになったのだ。

●ボズナンの慈済ボランティアは医療用ポーランド語コースを開設した。募集開始から12時間もしないうちに、50人以上のウクライナ籍医師や看護師、医療専門家が登録した。

(写真の提供・張淑兒)

歯科の施療

もう我慢しなくてもいい

ボズナンのボランティアチームは、さまざまな支援を毎月延べ千三百人以上に提供している。成人向けの職業訓練コースでは、医療用ポーランド語、理容や美容、スタートアップなどの講座があり、子供や青少年向けにはコンピュータプログラム、英語、体操、絵画やチェスなどの教室もある。

ポーランドでは、無料で歯科治療が受けられる範囲がかなり限られており、健康保険への加入を強いられている勤労者

家庭であっても、簡単な検査サービスしか受けられず、予約してから診察するまで、二カ月から六カ月待たされることもある。個人経営のクリニックで診察を受ければ、日本円にして四千元以上の診療費が必要になる場合もある。その上、拔牙や根管治療になると、更に高額な費用がかかる。仕事のないウクライナ人家庭にとって、大きな負担である。

歯の痛みは待つことができない。ルカシユさんと張さんは、ボズナン医科大学付属病院のカロリナ教授の支援を受けて、月に一度、避難民に無料の歯科治療サービスを提供している。



ウクライナ南部の都市ザポリージャは原子力発電所があることから、戦争初期にロシア軍に占拠された。三十八歳のカテリーナさんは、二人の未成年の子供、ローマン君とヴィクトリアちゃんを連れて避難し、昨年三月九日にボズナンに到着した。彼女の七十歳の父親、ヴォロディミルさんも、数々の困難を乗り越えて、やっと彼女と合流できた。

慈済の買い物カードを受け取ったカテリーナさんは、元々は専業主婦なので、まだ適当な仕事は見つかっていない。毎月の家賃二千三百ズウォティ（約

八万七千円）に加えて歯の痛みにも悩まされ、それでも歯を食いしばって耐えてきた。今年六月に歯の治療を受け始めてから、ようやく痛みが和らいだ。

今年三月、アンナさんは、片手に生後三カ月の娘を抱え、もう片方の手で未成年の息子の手を引いてポーランドに到着したが、経済的な制約から自分の健康を後回しにして、使えるお金を全て保育と家賃に費やした。

「ここには親戚や家族はいません。軍隊の最前線にいる夫の無事を毎日祈っています。ただ彼に生きていて欲しいだけ

です。何時の日か再会できることを願っています。アンナさんに母親としての勇敢さが見えた。しかし、彼女は出産後に次々と歯に問題が発生し、息子のヘリブ君も虫歯になったが、ようやくカロリナ教授の無料診療を受けられるようになった。

ヘリブ君は慈済のチェス講座にも参加するようになった。週に一度の授業で力を伸ばし、周囲から敬服される棋士に成長し、ボランティアからも将来の活躍を祝福されている。

●ボズナン医科大学歯学部は慈済と協力して、経済的に困難なウクライナ家庭に毎月無料の歯科治療を提供している。（写真の提供・張淑兒）

寄り添いに感謝 私のために泣かないで

ポーランド東部に位置するルブリンはウクライナ国境に最も近いだけでなく、生活費が最も安い都市である。避難した人々の多くはそこを中継地とみなし、短期間滞在した後、次の目的地へ向かう。そこに留まっているのはお金に余裕がない人たちで、他の生活レベルが高い地域に行くことができないのだ。また、全てを使い果たし、ウクライナに帰る時も長距離を移動する必

要がない。そのような背景や考えを聞くと、心が痛んだ。

ウクライナ人と地元ポーランド人、そして台湾の留学生で結成されたルブリン慈済チームはこの一年余り、高齢者や心身障害者たちがそこで順調に生活できるよう、重点的に支援している。

ポーランド政府は、ウクライナ人の高齢者に月額日本円にして約一万一千円を支給しているが、高騰し続ける生活費には追いつかない。慈済は、昨年九月から六十五歳以上の高齢者に果物、野菜、穀物、豆などの食品を配付



し、健康を維持するのに十分な栄養のある食べ物を確実に摂取できるようにさせている。配付する人数は一回に二百人から二百五十人だが、ほぼ毎日見たことがない人たちが助けを求めてくるため、十日から十四日ごとに配付している。

●ウクライナ人高齢者のウラジミール・グランディンさんは、懸命に作品を販売して義足の装着費用を貯めた。ボランティアも8月に家庭訪問した際、行動で支援した。

ボランティアたちは、心を込めて変化に富んだ食材を提供している。八月下旬の配付を例にとると、卵、パン、油、そばの実、トマト、キュウリ、ズッキーニ、バナナ、梨などで、お年寄りでも簡単にサラダやメインディッシュが作れ、それにスープを作る

●ボズナンの慈済チームは様々な職業訓練や文化講座を提供し、ウクライナの少年フリブ君（左）は毎週チエスの教室に通っている。（写真の提供・張淑兒）



ための根茎類もたくさん用意した。

ポーランドに留学し、卒業後もルブリンに留まって、ネイルサロンを経営しているアナスタシアさんは、同胞の苦しみを目の当たりにして、カリタス基金会のボランティアに参加し、今は慈済との連絡窓口になっている。「慈済は途切れることなく高齢者たちのサポートを続けていて、本当に感動させられます」と彼女が言った。

配付活動が終わると、高齢者たちは重いエコバッグを背負ったり、引きずったりして一人ひとり帰って行くが、そ

の孤独な背中を見ると、ボランティアたちいつも胸が締め付けられる。しかし、高齢者たちは逆にボランティアたちを慰め、「私たちのことは悲しまないてください。私たちはこの先十日間も食べるものがあると思うと、とてもうれしいのです。食糧の心配をすることなく、安心して眠ることができるからです」と言った。そして、「本当に有難う。十日後にまた会いましょう」と、この一年間付き添ってくれた慈済に感謝の気持ちを表した。

（慈済月刊六八四期より）

息子の問いは意味深い

なぜ医者になりたいのか？

医学部在学中、私も同じような問いを投げかけられた。

医者になって三十年余り経った今、私の答えは、

その頃とは変わった。

息

子が高校三年生の時のことだ。大学入学共通テストが終わって、各学校の医学部の二次試験である面接の準備をしていた。四月

中ずっと面接の練習をしていた彼が、私に幾つかの問いを投げかけた。

それらは、医者を生業としている私にとって、改めて考えさせられる

ものだった。

質問一、「お父さんは、どうして医者になりたいと思ったの？」。

これは、面接で聞かれるかもしれない。私はしばらく考えてから答えた。しかし、それは三十年余り前の私の答えとは、大きく異なるものだった。

「患者に向き合った時、そこに見えるのは病だけではなく、一人の『人間』なんだよ」と私は答えた。その人は病気が治り、元気になって喜び、そして、彼の家族は中くらいか大きな喜びに浸るのである。家族以外にも、彼の二等親、三等親、友人や親戚、皆が嬉しくなると私は信じている。

一人の人間を助けているとしか見えないかもしれないが、実はその人を助けるだけでなく、同時にその人の家族をも助けることになり、ひいては彼の友人にまで影響が及ぶのである。その類の喜びと感染力は、直ちに感じ取ることができる。慈濟ボランティアが人助けをするということと同じなのである。



質問二、「お父さんは、どうして宜蘭に家があるのに、嘉義を職場にしたの？その後また、北部に行って勉強したのに、また、花蓮慈濟大学で教鞭を取るようになったのはなぜ？忙しく走り回って、時には日帰りすることもあるのは、何のためなの？」

私は息子にこう答えた。

「医者は一生涯の中で、数百人、数千人しか助けられないかもしれないが、私はもっと多くの人を助けたいと考えたからだよ。母校の大学院で勉強してから、慈濟大学で教鞭を取れば、何百、何千人ではなく、

何万、何十万人、ひいては次の世代、そのまた次の代までも助けられるかもしれないと思っただからだ」。

そして、私たち慈済ボランティアも同じように、今助けているのは目の前の人だが、このような良い心がけと良い考えが次の世代にも影響を与え、彼らも君と一緒に善行をして、次のまた次まで影響していくかもしれないのだ。このように功德を積むことができれば、どんなに素晴らしいだろう。だから、ここ数年こんなにも苦勞してきたのだ。

息子は聴き終わるとこう言った。

「お父さん、本当に大変だね。体には気をつけてねー」。

子供から関心を寄せられ、健康まで気遣ってくれた。今年は大腸の内視鏡検査を受け、二つのポリープが見つかったが、早目に処置したので、病変の可能性は避けられた。この警告は、自分の健康に対してだけでなく、患者への衛生教育にも役立っている。

私たち耳鼻咽喉科医は五官を見るが、口から入る食べ物は食道、胃、小腸、大腸を経過して肛門から排出される。大腸と耳鼻咽喉科は関係があるだろうか？勿論ある。病は口から入るのだから。台湾癌基金会の調査によると、今の若者は、大腸の健康に対して認知が非常に低い上に、飲食と生活習慣が乱れている人が多い。大腸癌の罹患率はここ数年急速に上昇しているが、このことが原因の一つとなっている。

実は、危険因子は遺伝の外に、主に飲食の内容にある。どのように予防すればよいか？それには菜食することである。豊富な食物繊維が含まれているので、排便を助けるからだ。もし代謝性の疾患である場合は、しっかりコントロールする必要がある。生活のリズムに注意して睡眠の質を改善し、排便が習慣になっているかを見極める必要がある。体調が悪い時は、すぐ医者に見てもらい、腸の健康を維持しよう。

(二〇二三年五月十八日ボランティア朝会の話から抜粋)

(慈済月刊六八一期より)

仏法は心の惑いを解く



悟りの智慧は、

現代風に言えば、

心理学であり、

感情で理解できないことを

解き明かします。

因縁の概念で以って

自我を整え、

悪縁をなくして、

善縁を結びましょう。

近

頃よく耳にするのは、慈濟人の真心のこもった「喜んで！」と言う発願です。私は心を打たれ、一層確信が強まりました。慈濟でこの一甲子（六十年）近く、一步一步と困難な道のりを一緒に歩んでくれた仲間感謝しています。後に続く人の抛り所となり、前には道を切り開く人がいました。正に皆さんの支えによって、今その道はとても平坦に敷かれました。

シンガポールとマレーシアの慈濟人が、長年精進して仏法を学び、私の「仏陀の故郷への恩返し」という心願も聴き入れてくれました。そして、この二年間、多くのチームがリレー式にネバー

ルとインドに赴き、コミュニティで志業を行い、家や学校を建設しました。中でもインド・ブツダガヤのシロンガ村では、三十六軒の大愛住宅が既に着工しています。間もなく、整然とした集落ができ、草ぶきのあばら家に住んでいた人たちは安心した生活ができるのです。私たちの真心と誠意はそこから始まり、そして現地の菩薩たちを啓発するでしょう。

世俗に言われている「恩返し」とは物質や金銭で恩情に報いることです。しかし、私たちの恩返しとは、仏陀の故郷で慧命を育むことです。もし二千五百年前に仏陀がこの世に生まれ、

修行を決意して衆生に悟りを開くよう教えることがなかったら、もしかしたら私たちは未だに迷いと不覚の中にあっただけかもしれません。

二千五百年前、シッダールタ王子は王宮から出て、城外で人民が苦しんでいるのを目にしました。即ち、病に患っても治療も薬もない人や老いても帰る家がない人々でした。目にしたのは病、苦しみ、貧困で、たとえ将来、王位を継いで権力があっても、これらの人を助けることはできません。どうすれば、人に苦しみを知ってもらい、如何にして「苦しみから逃れる法」を教えたら

智慧を有していますが、ただ愚かな凡夫であるだけで、清らかな本性は煩惱と無明に汚染されています。よく言われる「人心の浄化」とは、迷いを悟りに転じ、迷える無明の心が正知正見に至ることなのです。

仏陀の悟りの智慧は、現代で言えば、心理学であり、心の迷いを消すことができるのです。人生において、老、病、死は自然なことですが、それでも悩みは尽きません。情の悩みや自由が得られない悩み、深い愛が転じた憎しみ等々、煩惱によって自分の心を傷つけています。智慧のある人は、人間（じん

良いのか。その真理を求めるために、家族を離れました。苦行を遍歴し、体と心の戦いの末、遂に宇宙万物の理を悟りました。

仏陀の時代は交通が不便で、歩いて行ける距離はそれほど遠くなく、現代のような設備がないため、音声が届く範囲も限られていました。仏典には、「仏陀の声音は、近くから遠くまで、十方に徹し至る」と書かれてありますが、可能でしょうか。これは仏陀が悟った真理の叙述であり、時間と空間に限りがなく、仏法を聴く者の心に届いたと言うことなのです。人は仏様と同等の

かん）の苦しみや行き来する生と死を理解しており、いつでもありのままに因、縁、果、報があるのです。

無常を認識することは、最大の悟りです。誰もが「無常」という言葉を口にしますが、実際に無常の道理を体験していなければ、不本意な境遇に遭遇すると、「私は何も悪いことをしていないのに、なぜこんな目に遭わなくてはならないのか」、「なぜ私が？こんなにたくさん善行をしてきたのに」と嘆きます。そのような考えを持つ人は、物事の因果関係が分かってなく、仏法が心に入っていないのです。

自分で理解できない心の問題は仏法で解決するのです。「因縁」という概念で以って心を落ち着かせるのです。さもなければ、どれだけ多くの人が説得しに来て、問題は解決せず、うまくいきません。心を開いて放下することによってこそ道は通じるのであって、決して苦しみの中に沈んだままではいけません。最も重要なのは、悪縁を解消し、善縁を結ぶことです。また、仏法で人を助け、煩惱を解きほぐさなければなりません。

私たちは今、仏陀が言った、「心を清らかにして、仏性を見出す」状態を享受

に足を踏み入れたシンガポールとマレーシアの菩薩たちに感謝します。私たちはもっと心して現地のことを皆と分かち合い、全力で支えなければなりません。「功德無量」とよく言われますが、一人ひとりの思いと善の力を少しずつ結集すれば、大きな功德を成し遂げることができなのです。

自然災害、人災、貧困、病に苦しんでいる人々がたくさん助けを待っています。一人で助けることはできず、少数でも力が足りません。皆が結集する必要があります。見聞きできれば、愛は行きわたります。仏法を弘めるこ

しているのですから、仏法は仏陀の故郷から伝えられたものですが、ここから回向させるのです。慈濟人は私たちの代で、二千五百年余り前の仏陀の心願を成就させなければなりません。慈濟の菩薩道では既にとっても多くの体験が積み重ねられており、世の多くの苦難にある人々を支援してきました。そして今、このような方法と経験を仏陀の故郷に根付かせて、現地の苦難にある人々の人生を反転させなければなりません。そして、この正法が永遠に存在し続けるようにするのです。

私たちに代わって、先に仏陀の故郷とができれば、人間（じんかん）は淨化されるのです。

仏陀がこの世に出現したという「一大事」は、菩薩法を教えるためなのです。菩薩になるまでに長い時間をかけて修行する必要はありません。私たちは皆、今生で菩薩になる縁があるので、法を聞き、法を受け入れ、法を伝えて、群衆に混じって仏法を実践することが即ち、弘法なのです。あらゆる人に福を作る機会を与えることが、衆生を利することです。「弘法利生」して、菩薩として現れるのです。皆さん、心して修行を続けてください！

（慈濟月刊六八九期より）

特別報道

時を経て受け継がれ 器用な手で蘇る

文・楊景卉 訳・済運

コーラン経筆写本

五百年前に書き写されたコーラン経は、血と涙が滲み、虫に食われ、水に浸かり、火災にも遭遇した。図書館の書籍修復士は、刷毛と「典貝帖紙」という和紙を使って一寸ずつ修復し、一年以上を費やして、五百ページにも及ぶアラアの言葉を元に近い状態に戻した。



(撮影・劉子正)



それは私が出会った中で最も古い書籍だと思う。虫食いの跡にしても破れた箇所にしても、あらゆる書籍に見られる問題がそこにはあった。筆跡とページに残された情報をもとに、紀元十五世紀から十六世紀の間に、十人の人によって書き写されたものである。それ故に、紙の年代や色が異なっており、修復作業する側にとっては一大挑戦であった。台湾図書館の

書籍修復士、徐美文（シユウ・メイウエン）さんは、詳細に調べた結果、五百年余り前に手書きで写されたコーラン経である可能性が高いと言った。そのコーラン経は皮革で綴じられているが、表紙は硬くなっ

●数百年間伝承されて来た手書きのコーラン経は、転々とした後、台湾のイスラム教徒である胡さんの手に渡ったことで、広く公の前に姿を現した。まだら模様になった麻の紙に異なった筆跡と濃さの異なるインクが見て取れ、虫に食われた後の穴や汚れた部分も確認された。（撮影・劉子正）

ていて、中身と分離してしまっていた。また、火災や水の被害の他、土砂に埋もれた形跡や虫食いによる損傷があり、血痕やカビ、泥、花卉、毛髪、植物の種及び虫の糞などの痕跡が見られるページもあった。

初歩的な検査では、その数百年前のコーラン経には三種類の虫がついており、低酸素除虫ボックスに一週間入れて、除虫する必要があった。その後で、もう一度詳しく検査した。徐さんは、本そのものと紙の構造を損傷しないことを原則に、柔らかい刷毛を使って一ページずつ清潔にしてから、五百ページ余りに及ぶこのコーラン経筆写本にページ数を入れた。

めてである。コーラン経を分解してからのようにすれば元の状態に復元できるか、徐さんは一歩一歩手を省くことなく、その古書に微かな手がかりを求めめることにした。

そこで彼女は、ページの間にあった昆虫の死骸や排泄物、植物及び紙の材質を取り出して、顕微鏡で細かく比較した。実は修復作業では、科学的な調査がとても重要になってくる。徐さんたち修復チームは三種類の紙を使っていることを突き止めた。それは顕微鏡で、紙の繊維の長さが相当長いことを発見したのである。

十五年の文物の修復経験を持つ徐さん

ていった。そして、表紙と中身を分離し、もう一度、消しゴムと消しゴム粉（文献修復や芸術品専用）で乾式クリーニングを施した。どの過程も時間を要し、「精細に修復するのにこれほど多くの時間をかける必要があります。ワンステップでも省けば、コーラン経にとって、良いことではないからです」と徐さんが言った。

細心の注意を払って修復 本来の色を取り戻す

徐さんは古い洋書を修復した経験はあるが、五百年前の古書を修復するのは初

は、国立台北大学古典文献の修士課程を卒業し、政治大学図書情報及びファイル学の博士課程を終えた後、紙の研究に何年も費やし、紙の歴史にとっても詳しくなった。「中東の紙づくりの技術は唐朝から伝わったもので、当時のアラビア帝国が、唐朝から紙造りの達人たちを捕らえて連れて来たのです」。しかし、紙の繊維の長さは中国でも時代と共に変化しており、唐代では麻の繊維を使った紙で作っていたが、アラビアでは樹木の成長が悪く、木の皮で紙を作るのは稀だった。そこでアラビア人は、ぼろ布と縄の中に含まれる麻の繊維で紙を作っていた。



長い年月を経て 台湾にやって来たコーラン経

このコーラン経の表紙と裏表紙には大きな穴が開いている（写真下）。専門家の推測によると、本来、その牛皮を使った表紙には宝石が埋め込まれていたが、何度も戦争や様々な天災、人災を経て、宝石が剥がれ落ちたことで、大きな穴が開き、牛皮は硬くなってひび割れしてしまったらしい。

ページを開いてみると、ひどくまだら模様になっていて、麻の繊維が露出していた（写真左上）。扉のページと繋ぐ糸は切れ、三種類の虫の死骸があり、昆虫の羽のようなものも見られたが、後でそれは花弁だと分かった（写真左下）。修復士の目には、あらゆる病を一身に集めた、重症患者のように映った。コーラン経には五百箇条の規則があるが、主な内容はユダヤ教の旧約聖書、プロテスタントの新約聖書と似通っている。（提供・写真左上、下右・台湾図書館。左下、下左・大愛テレビ番組作成部門）



十五、六世紀になってから、紙の原料として麻と楮皮（こうぞの木の皮）が出現したらしく、このコーラン経に使用された紙は、麻の紙だという推測で皆が一致した。

紙は、書籍を修復するのに必要な材料の基本であり、総合的にこの古いコーラン経の紙の質を推測することはできるが、現代で使われている紙で類似したものを見付けることは、なかなか難しかった。台湾図書館は、古い楮皮で破れた箇所を修復してみたことがあるが、書籍自体の紙に貼りつけても合わなかった。そして、何軒も製紙工場を訪ねても、類似した質の紙を見付けることができない

かった。その時、徐さんは、以前麻の紙を購入したことがあり、それが国立台湾図書館の倉庫にあることを思い出した。自分たちの倉庫で、数百年を経たコーラン経の紙の質と厚さ及び年代が近い日本の麻の紙を、遂に見つけた。「麻の紙は真っ白ですが、コーラン経の紙はページによって色の濃さが異なっていたため、古い紙の感じを出す方法を考えなければなりませんでした」と徐さんが言った。

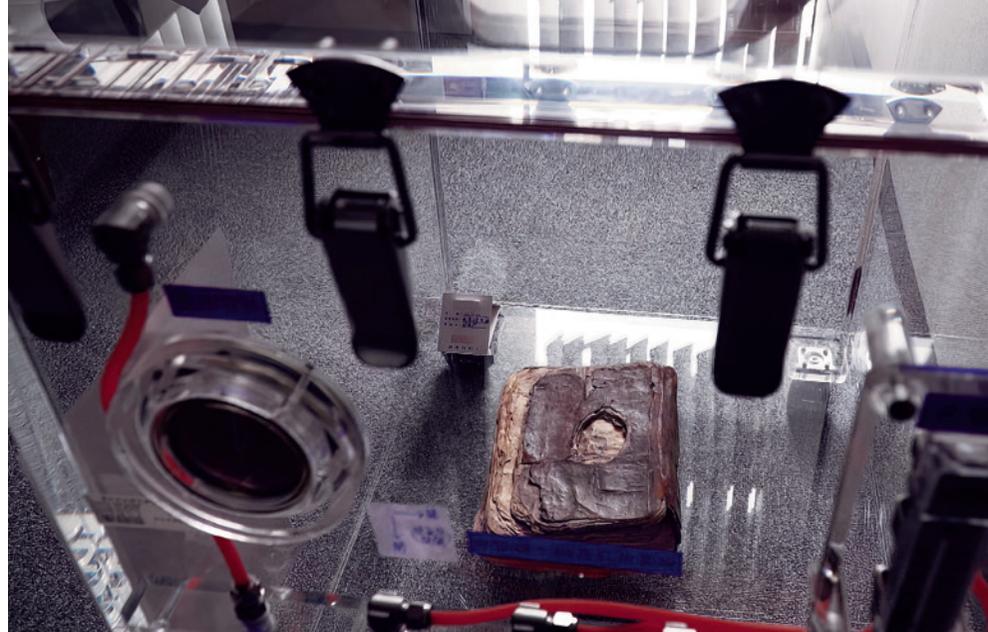
苦心惨憺して古く見せかける

新北市中和四号公園脇の台湾図書館五

階の片隅にある「台湾図書館」。三人の修復士が染料を配合していた。水を取りに行く人や染料を加熱する人の他、徐さんはピレットとメジャーカップを使って染料の必要量をグラム単位で計りながら、配合し始めた時のことを思い出した。修復する前から、そのコーラン経筆写本は十五、六世紀のもので、その時代に使われていた染料は現代の物とは異なることを推測していたため、徐さんは、植物性や鉱物性のもから試みた。「最初に紙を染めてみたのは植物性染料で、様々な植物を煮込んでみました。例えば、キハダや山椒に墨を加えたものを配合して

みましたが、思うような色は出ませんでした」。何度植物性染料で試しても、満足のいくものではできなかった。その時、彼女はふと、中東地域は砂漠が多く、オアシスが少ないことに思い至り、鉱物性染料に変えてみた。そうして何度も配合した結果、遂に配合比率を確定することができた。

紙の材料探しから染料の配合まで、徐さんは八カ月時間を費やした。中でも、文字を守るために、蟬の羽のように薄い日本製の修復紙「典具帖紙」を使うことにしたので、コーラン経のページと貼り合わせる時、糊の水分で文字がぼやけな



いかが心配だった。そこで、水に濡らした晒し布を固く絞ってから、少しずつ「伸ばしたり、転がしたり、押さえつけたりする」動作を繰り返した。それは台湾図書館の図書病院、或いは台湾全土で初めて行われた修復技法であった。古書を修復する時、決まった方法があるわけではなく、古い感じを出すために、修復過程

●コーラン経の修復は手順を追って行われた。先ず古書を低酸素の除虫ボックスに一週間入れ、99.9%の濃度の窒素ガスを注入して、害虫を徹底的に除去した(写真右上)。その後、表紙と中身を分離し、各ページにページ数を入れ、柔らかい刷毛で全ての異物を取り除いた(写真右下)。そして、消しゴムで時計回りに円を描いて乾式清掃を施した(写真上)。(写真・大愛テレビ番組作成部門)

では絶えず新しい可能性を試す必要がある、と徐さんは言う。古書の修復は文化の継承における重要な作業であり、現在台湾にはまだ東洋と西洋の双方を教える書籍修復士の養成講座はないので、修復士が自発的に異なった領域の専門家に教えを請うしかない。

今回、数百年のコーラン経を修復した時、徐さんは特別に、書画を表装する技法を用いて修復した。「普段、修復する時、ページが重ね合わされる部分を三ミリ以内にすることで、視覚上の美観を保つことができません。これは書画を表装する時

数百年のコーラン経との出会い

「二年間余り、その過程は本当に苦痛以外の何ものでもありませんでした。私は、丁寧に革製の表紙を剥がした瞬間、涙が出そうになりました。今思い出しても、涙が出そうになります。本当に苦しかったのです。いつも思うのですが、どうしてあのような物件を引き受けたのだろう、と。それは石を持って、自分の足に落とすようなもので、本来なら楽しい時間を過ごせたのに……。今、私は休暇を全部返上して、この經典に打ち込んで

の道理と同じです。そこで私はコーラン経を書画に対する方法で修復することにし、コーラン経の一ページ一ページを書画のように扱いました」と彼女が言った。

古書が新しい材料に出会った時、「古いものの古さを残して修復する」ことは最高の境地と言える。徐さんが穏やかながらも堅持を貫き通したことで、数百年のコーラン経に芸術性が加わったのである。虫の駆除と整理、修復、表紙の作成など全ての過程で、徐さんはあたかも茨の道を進むように万難を克服し続けたが、実は内心、相当な苦勞をした。

います」。五百ページ余りのコーラン経の修復は彼女が思っていた以上に困難で、表紙を修復する時に、止めてしまおう、とさえ思ったことがある。しかし、次の瞬間、数百年前のコーラン経に出会った時の初心を思い出した。

二〇二〇年七月五日、モスリムの慈済ボランティアである胡光中（フウ・グワンズオン）さんは家の中にあつた五百年余りの歴史を持つコーラン経筆写本を、仏教慈済慈善基金会の創設者である證嚴法師に寄贈した。法師は、そのコーラン経をめくった時、紙が変色して脆くなつて



本来のような古い感じを出す 修復作業は煩雑である

透明で柔らかく上質な典具帖紙(てんぐちようし)は、両面印刷や筆写に適しており、徐さんは特別に日本から高値で買い付けた(写真提供・大愛テレビ番組作成部門)



古書はページごとに色や紙質が微妙に異なるため、古書本来の雰囲気を出すためには、色の調合を試みる必要がある（写真右上&右下）。当時の中世と中東地域の特性を考慮した後、8カ月かけて色を試作した結果、鉍物で染めて自然乾燥させることにした。（写真上）。（写真提供 写真右上・台湾図書館。その他・大愛テレビ番組作成部門）



いて、虫までついていることに気づいた。そこで、修復する考えが頭をもたげ、胡さんと呉英美（ウー・インメイ）さんにも協力してもらって図書館で修復してもらうことにした。

その時の法師の無私の大愛と宗教家としての心情は、徐さんに深い感銘を与えた。徐さんは仏教徒でもイスラム教徒でもないが、經典の書籍を尊重する心で修復作業を続けた。最初の頃、彼女は豚肉を食べるのをやめ、よくコーラン経と対話した。無意識のうちに、背中を押してくれる力を感じ、表紙を剥がすことを決意した。「実は最初、表紙は修復しなくてもよいと

思っていました。というのも、表紙の損傷が激しく、皮革そのものが硬くなっていたからです。私は上人が長い間菜食していらつしやることを知っていました。しかし、動物の皮を使わず、一般的なPU皮革を使ったら、元の感触を出すことはできません。上人が私たちを信頼し、專業を尊重してくれたことで、一層修復作業を進める力が出ました。とても感謝しています」と徐さんが言った。證嚴法師の支持とコーラン経の導きで、徐さんはアメリカの最新技術を使って、「紙を使った」表紙の修復を進め、皮革の老化を遅らせることに成功した。新たに作られた表紙を古い

修復作業では接着後の接着剤の水分で文字が汚れないように刷毛やピンセットなどの道具を使い、固く絞った晒し布で優しく押したり、転がしたり、押し付けたりしながら丁寧に作業を進めた。（写真提供 写真中・台湾図書館。その他・大愛テレビ番組作成部門）





● 500 ページ余りに及ぶ《コーラン経》の筆写本。原本のページは殆ど損傷していたが、台湾図書館のチームが3年近い時間をかけて修復した。任務が完了して静思精舎に送り返した時、台湾の古書籍修復技術の水準の高さが証明されると同時に、宗教の垣根を超えた愛と尊重の情を目にすることができた。



大愛テレビ局が作成した《コーラン経本の修復：本来の状態——古代コーラン経本の復元》のドキュメンタリーが、第57回ヒューストン国際映画祭の宗教類動画制作で「シルバー賞」に輝いた。



ドキュメンタリー



表紙に糊付けすることで、コーラン経本来の様相が復元されたのである。

古書の修復は文化の伝承

「フランスの有名な修復師でも、三十%以上損傷している書籍は修復しないことにしているのですが、このコーラン経の損傷範囲は非常に広く、特別な重大疾患を抱えている病人のようなものです。殆ど一冊全体を修復しました。時間をかけて丁寧にケアし、各段階で細心の注意を払わなければなりません」。徐さんにとって、このコーラン経は彼女の患者のよう

なもので、毎日、中身のページや表紙の変化を観察しなければならなかった。特に修復の最終段階では、図書館に着くと、真っ先にコーラン経に挨拶に行った。「何故、その古書の修復にあれほど時間をかけたかというと、もちろん歴史的な意義があり、紙に価値があるからです。私たちの行いは正に文化の伝承なのです。もし今、丁寧に修復しなければ、未来の人はこの経典も紙も文字も目にすることはできません」と徐さんが言った。

この一冊の古書の修復に三年近い時間を費やした。効率を追求する今の時代で、修復師の手の器用さが証明され、紀元

十五、六世紀の歴史の軌跡と奥深い文化を目にすることができた。台湾図書館の曹翠英（ザオ・ツイイン）館長によると、コーラン経はイスラム教のとても重要な経典で、それを元来の姿に近づけて修復したのである。台湾図書館にとっても修復した最古の西洋古書の最初のケースであり、この事は歴史的に意義が大きく、専門職の能力が肯定された出来事でもあるのだ。（経典雑誌三〇〇期より）

●修復された経典は、徐美文さんが證嚴法師に手渡した。「これからもコーラン経を尊重して参ります。この書籍は数百年の時を超えて存在した価値があり、私は大切にします」と法師が言った。（写真提供・慈濟基金会）



批判を警鐘と受け止める

◎文・釋徳侃／訳・済運



人にはそれぞれの見方があり、批判を注意の喚起と受け止め、批判した人が教育してくれたのだ、と感謝しましょう。

完璧な人はいない お互いに尊重し合おう

慈済学術諮問顧問委員会の昭慧法師と十数名の教授や準教授たちが、上人と座談しました。

上人はこう語りました。自分は元々とても内気で、人前で談話することは滅多にありませんでした。しかし、人間（じんかん）に苦難が多いため、何か人の役に立つことがしたいと常々思っていました。そのためには、より多くの同じ志を持った人の力を集めて、心を一つに

事を成す必要があると考えました。そうすれば、事は順調に運び、より人間（じんかん）を利することができます。そして今、教育界にこれほど多くの心ある人や教育に熱意を持つ人がいて、慈済と交流しているのを見ると、大きく希望に満ちてくるのを感じます。皆さんが心して努力することで、仏法を人間（じんかん）に根付かせてくれることを期待しています。仏法を講釈したり、仏教の名を使ったりしなければならぬわけではなく、人間（じんかん）を利して、人心の偏りを正しく導きさえすれば、心は広くなり、何事も人のためにと思いうようになります。それは即ち、仏陀がこの世に来て衆生を悟りに導こうとした心願を達成することにほかなりません。

上人は言いました。「この世で何かをしようとして、自分と違った考え方ややり方を持った人に出会った時、批判されることがありますが、それを自分への注意の喚起と受け取り、間違いを犯してはならないと自分自身に警鐘を鳴らし、批判してくれた人が教育してくれたのだと思って感謝すべきです」。



北投区のリサイクルボランティアである陳政祥（ツン・ジンシャン）師兄は、辰年を迎えるに当たって、回収したミルクボトルやペットボトル、プラスチック缶などを使って、器用に、今にも羽ばたきそうな龍を作成しました。上人はそれを例に挙げてこう言いました。「ゴミの分別と資源の回収には、大きな道理の教育の意義が含まれています。慈済のリサイクルセンターには多くの高齢ボランティアがいて、あらゆる種類のプラスチックを手で触るだけで、非常に細かく分類することができるだけでなく、北投区のリサイクルボランティアが、ミルクボトルやペットボトル、プラスチック缶などを使って、今にも羽ばたきそうな龍を作成した。（1月11日）

く、参観者にも話しかけています。そして、回収物から人々が称赞するような美しい芸術品までも作り出しています。高学歴ではないかもしれないませんが、智慧を持っており、人には無限の可能性が秘められていることを証明しています。

食事前の五観の偈（五つの心構え）

歳末祝福会で二〇二三年の「慈済大蔵経」（二〇二三年の回顧）のビデオが放映されましたが、世界で四大元素の不調和による数多くの災害と、人心の不調和による戦禍が起きていることが分かります。上人は感慨深げに言いました。この世は苦難ばかりですが、皆さんは平和な台湾で暮らせるということに、心から感謝しなければなりません。

古代の僧が私たちに、目の前にある食べ物は容易に得られたものではないのだから感謝しなければならない、と『五観の偈』を教えてください。食事する時に持つべき五つの心構えとは：

- ・ 一つには功の多少を計り、彼の来処を量る。
 - ・ 二つには己が徳行の全欠を付って、供に応ず。
 - ・ 三つには心を防ぎ、過を離るることは、貪等を宗とす。
 - ・ 四つには正に良薬を事とするは、形枯を療ぜんがためなり。
 - ・ 五つには成道のための故に、今この食を受く。
- 上人はこう解説しました。「一つ目の意味を考えてみてください。目の前にあるご飯は、種粃を撒き、苗になれば田に植え、成長すると稲穂が実り、それを収穫して脱穀し、包装を経て初めて流通販売され、それが家々に届くのです。その過程でどれだけの労力と時間を費やして、大変な農耕作業が行われてきたことでしょうか。また、ガスや電気、そして調理器具もあってこそ、香ばしいご飯が炊き上がるのです。ですから食事する時、必ず感謝の気持ちと共に、自分は人間（じんかん）でどんな貢献をして徳を積んだか、このような美味しい食事をするに値するか、を考えてみるのです。精舎の常住尼僧たちが自力耕（更）生しているのは、こう考えているからなのです」。
- また、警戒心を高め、自分の心が偏って徳が失われまいよう、過ちから遠ざからなければなりません。「何故、徳が失われるのか？ 欲があるからです。自分は欲を起こしたのではないかと反省しましょう。この食事は、お腹を満たして栄養を補給するために頂くのであって、美味しいものを食べたいという欲望で選んだわけではありません。『健康を保つための良き薬と受け止める』のです。欲を起こさなければ、間違いを起こして業を造る事はありません」。
- 上人は言い聞かせました。お粥も食事も簡単に得られるものではないのだから、感謝の気持ちを持って頂くのです。姿勢を正して座り、「悟りを開くにはこの食事を受け取るべきである」と自分に言い聞かせましょう。修行をしていくためには健康でいなければならず、そうすれば十分に体力がついて心身が整えられます。やるべきことを成し遂げ、時間を無駄にせず、悟りに到達するのです。
- 足ることを知るようになれば、欲念を取り除くことができ、日々がとても満足したものであれば、自ずと、感謝と喜びの心を持つと共に、奉仕することに喜びを覚え、善行して人助けすることで徳行ができるようになります。（慈済月刊六八八期より）

四月の出来事

訳・済運



午前7時58分、台湾東部沖でマグニチュード7.2の強い地震が発生し、花蓮県で最大震度6の揺れが起き、死者10人以上、負傷者千人余り、多数の家屋が損壊する被害が出た。慈済基金会は8時20分に本部で災害対応センターを立ち上げ、県政府と協調して災害支援を進めた。

04・04

慈済インドネシア支部の家屋建設支援プロジェクトは、2006年から首都ジャカルタで展開され、その後当国の各地に広めている。本日、西ジャワ州スカブミ県で完成した3戸の入居式が行われ、同時に10キロの米と20パックの静思書軒提供の乾麺を含む60セットの生活

物資が現地住民に配付された。

◎アメリカのオハイオ州とインディアナ州で、それぞれ2月28日と3月14日に竜巻が襲い、多数の建築物が損壊し、3人が死亡した。慈済シカゴ支部は4月6日、インディアナ州で配付を行い、全壊またはひどく損壊した33世帯の98人に1000米ドルの買い物カードと祝福パックを贈呈した。同月14日にはオハイオ州で配付が行われ、800米ドルの買い物カードと祝福パックを58世帯の174人に贈った。

◎アメリカ・ハワイの慈済ボランティアはマウイ島森林火災被災者支援で、2023年8月に続いて本日、甚大被災地区のラハイナ町の住民で、幼児や病気の高齢者がいる世帯のうち、支援を必要としている145世帯に買い物カードを提供した。

04・06

0403 花蓮地震 慈濟の支援活動図

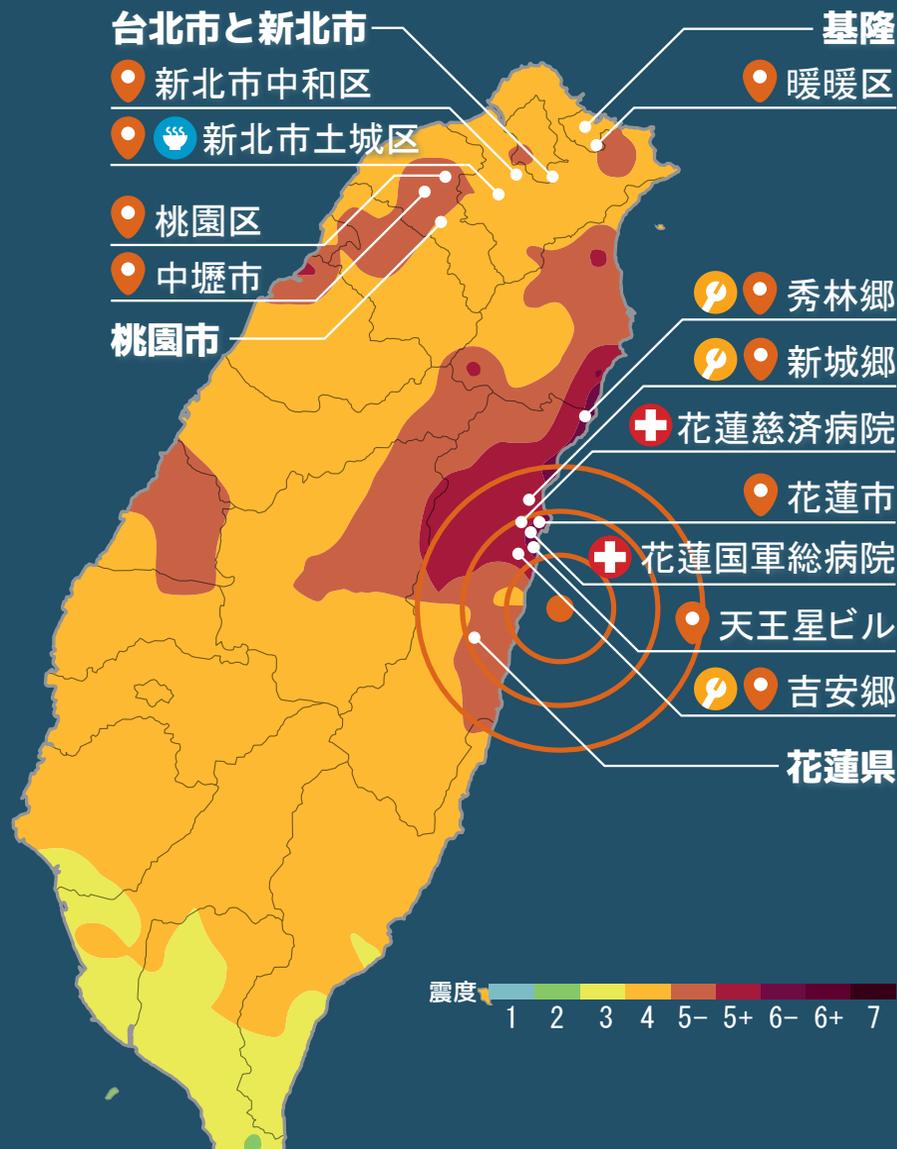
支援統計

2024年4月3日～4月22日

- 応急手当で **1,479** 世帯
- 見舞金 **46** 人
- 祝福セット **1,725** パック
- 炊き出し **6,256** 食
- ミネラルウォーター **105** 箱
- 福慧ベッド 延べ **530** 床
- 間仕切りテント **105** 帳
- 毛布 **424** 枚
- 家屋の修繕 通報件数 **215** 戸、視察後に施工
- ボランティア動員数 延べ **4,157** 人
- 世界 **46** の国と地域で愛を募る募金活動を展開

支援項目

- 応急手当と祝福セットの提供
- 避難所への支援
- 奉仕センターの立ち上げ
- 構造上問題のない、小規模損壊住宅の修繕
- 入院している負傷者への見舞い
- 被災者の落ち着き先支援





● 4月5日午前7時半、1機目のヘリコプターが着陸し、慈済が支援した物資を受け取った（下）。天祥地区に留まっていた外国人観光客たちは機内から降りても動悸が止まらず、ボランティアが関心を寄せた（左）。（撮影・陳光華）

当時、山岳地帯に足止めされていた観光客やホテル従業員、民衆及び天祥派出所や保七総隊など公的機関の人員、合わせて600人余りが食糧と水を必要としていた。慈済は花蓮警察、内政部空勤総隊と協力し、道路が開通されるまで持ち堪えられるよう、2回に分けて空輸すると共に、世界中の慈済人の気遣いを第一線にいる捜索隊員に届けた。



臨時の住まい 尊厳と安全

災害救助の利器は、慈善経験の蓄積と啓発から始まる。
エコ素材：大衆を守ると同時に地球の資源を大切に作る。

(撮影・許政雄)

① ジンスー福慧エコ間仕切りテント

開発 2019年～2020年にかけて災害予防訓練とボランティア訓練で使用を開始。 重量 7.56キロ

材質 一張り分の生地は、回収された600ml入りのPETボトル280本を使用して生産。

特徴

- ・コンパクト収納で、2分以内に組み立て完了可能。
- ・個人空間を仕切り、プライバシーが向上
- ・延焼防止効果のある化学繊維テント生地
- ・弾力性のあるワイヤーフレームを使用しているため、支柱を立てる必要がない。



1



●地震が発生した当日の昼、慈濟は政府が立ち上げた避難所を支援した。その晩、精舎の師父が訪れて被災者を見舞った。

(撮影・陳榮欽)



(撮影・鄭啓聡、蔡素美)

2 大愛感恩科技公司のエコ毛布

- 開発** 2006年。以後、改良を続け、厚手のものもある。
- 材質** 回収PETボトル67本 **重量** 1809グラム
- 特徴**
- ・柔らかくて保温性が良い。洗濯が簡単で乾きが早い。水洗いしても色褪せしない。
 - ・水を使わない先染めをすることによって、生地染色工程で発生する水汚染を防いでおり、節水と同時に、化学物質による環境への二次汚染を大幅に減らしている。
 - ・100%回収PETボトルから再生されており、「ゆりかごからゆりかごまで(C2C)」のシルバークレジット認証を得ている。

3 ジンスー多機能福慧ベッド

- 開発** 2013年 **重量** 15キロ
- 材質** 食品包装用PP。皮膚に接触しても安全。
- 特徴**
- ・耐荷重は150キロ
 - ・素手で組み立てられ、道具は不必要。
 - ・ベッドは通気孔がある設計で、通気性が良く、快適。
 - ・地面から30センチの高さがあり、湿気が多くて蒸し暑い所や浸水した環境にも使用可。
 - ・その他、福慧テーブルと椅子があり、全て折りたたみ式で、持ち運びに便利。

04・13	<p>04・12</p> <p>日本の慈濟ボランティアは、0403花蓮地震で街頭募金を始めた。14日、東京で、新宿と新大久保駅での募金活動、代々木のホームレスへの配付、人文教室での活動などが行われた。大阪では、西城区で炊き出しを行った際、日雇い労働者たちから愛の募金を募った他、17日から23日まで天王寺の近鉄デパート前で街頭募金活動を行う。</p> <p>慈濟アメリカ総支部は「心を一つに共善し、愛を台湾に届ける」愛の募金活動を展開し、本日、仙台市の有名な店である「Gyutan Tsukasa USA Inc.」の鈴木大介副総裁と木原智美経理部長が相沢幸司総裁の代表として、サンディヤマス志業パークに10万ドルを寄付した。これは、</p>
	<p>0403花蓮地震で影響を受けた学校に「コンピューターなどの設備を提供する他、各種教育プロジェクトを通して、学生たちのデジタルテクノロジーでの学習向上を支援する。</p>

04・11	<p>04・07</p> <p>慈濟カンボジア連絡所は、2016年からプノンペン市ダンコー区のゴミ山周辺に住み、廃棄物を拾って生活をしている住民に対して、三カ月に一回、定期的に配付活動を行っている。本日ボランティアは474世帯の住民に、米とビスケット、トースト、ミネラルウォーターなどを配付すると共に、0403花蓮地震被災者のための祈りと竹筒貯金箱による愛の心を募る活動を行った。</p> <p>慈濟基金会とASUSは、「企業共善協力活動」で覚書を交わした。</p>
04・06	<p>◎3月14日夜間、アメリカ中西部は竜巻に襲われ、インディアナ州ウインチェスター市とその周りの町が大きな被害を受けた。慈濟インディアナ連絡所は17日、被災地区の視察を行った。本日シカゴ・デイトンのボランティアは、当市で33世帯に買い物カードとマフラー、エコ毛布、即席麺などを含む祝福パックを配付した。</p>

04・24	<p>◎大愛テレビ局が作成した《コーラン経本の修復：本来の状態——古代コーラン経本の復元》と《仏教精神の味》の二つのドキュメンタリーが、第57回ヒューストン国際映画祭の宗教類動画制作及び短編ドキュメンタリー部門で「シルバー賞」に輝いた。</p> <p>◎慈済基金会の顔博文執行長は本日、日本中日新聞社のオンラインによるインタビューと、東京放送テレビ局（TBS）取材チームによるインタビューを静思精舎で受け、台湾の0403花蓮地震と能登半島地震後の慈済の緊急支援及び動員、運用等に関する行動について分かち合った。</p>
	<p>阪府池田市の池田くればロータリークラブと千葉県つくば市のつくばシティロータリークラブに代わって、45万円を寄贈して、慈済の0403花蓮地震支援活動に呼応した。</p>

04・23	<p>慈済基金会の「企業共善合作プロジェクト」で、本日、植境複合概念館において、台北老松ロータリークラブと共同で「慈善協力寄贈式」を行った。当クラブは他の団体と共に10万円を寄付すると共に、大</p>
04・17	<p>慈済アメリカ総支部は、「アメリカ国土安全保障省、信仰に基づく近隣パートナーシップセンター（DHSセンター）」の要請に応じ、アメリカ合衆国連邦緊急事態管理庁（FEMA）が主催する「他宗教リーダーによる気候変動の影響からの回復力に関する円卓会議」に参加した。そして、初めて福慧ベッドや福慧間仕切り、最新の研究で開発された蚊帳と「福慧収納キャビネット」などジンスー福慧家具シリーズを展示した。</p>
	<p>2011年3月11日の東日本大震災の後、台湾国民と慈済ボランティアが日本の被災者に対して行ったケアと支援へのフィードバックである。慈済アメリカ総支部は、「アメリカ国土安全保障省、信仰に基づく近隣パートナーシップセンター（DHSセンター）」の要請に応じ、アメリカ合衆国連邦緊急事態管理庁（FEMA）が主催する「他宗教リーダーによる気候変動の影響からの回復力に関する円卓会議」に参加した。そして、初めて福慧ベッドや福慧間仕切り、最新の研究で開発された蚊帳と「福慧収納キャビネット」などジンスー福慧家具シリーズを展示した。</p>

各国の連絡所

本部

971 花蓮県新城郷康樂
村精舎街 88 巷 1 号
TEL: 886-3-8266779/886-3-8059966
志業センター (静思堂)
970 花蓮市中央路三段 703 号
TEL: 886-40510777 # 4002
0912-412-600 # 4002

アメリカ

総支部 (San Dimas)
TEL: 1-909-4477799
北カリフォルニア支部
TEL: 1-408-4576969
ニューヨーク支部
(New York)
TEL: 1-718-8880866

香港

TEL: 852-28937166
フィリピン Manila
TEL: 63-2-7320001
タイ Bangkok
TEL: 66-2-3281161-3

花蓮慈済医学センター
970 花蓮市中央路三段 707 号
TEL: 886-3-8561825

玉里慈済病院
981 花蓮県玉里鎮民権街 1-1 号
TEL: 886-3-8882718

関山慈済病院
956 台東県関山镇和平路 125-5 号
TEL: 886-89-814880

大林慈済病院
622 嘉義県大林鎮民生路 2 号
TEL: 886-5-2648000

台北慈済病院
231 新北市新店区建国路 289 号
TEL: 886-2-66289779

台中慈済病院
427 台中市潭子区豊興路一段 88 号
TEL: 886-4-36060666

斗六慈済病院
640 雲林県斗六市雲林路2段248号
TEL: 886-5-5372000

慈済大学

970 花蓮市中央路三段 701 号
TEL: 886-3-8565301

台北支部 (新店静思堂)

231 新北市新店区建国路 279 号
TEL: 886-2-22187770
慈済人文志業センター

112 台北市立德路 8 号
大愛テレビ局
TEL: 886-2-28989000

静思人文
TEL: 886-2-28989888

カナダ Vancouver

TEL: 1-604-2667699

メキシコ Mexicali

TEL: 1-760-7688998

ドミニカ Santo Domingo

TEL: 1-809-5300972

ブラジル Sao Paulo

TEL: 55-11-55394091

イギリス London

TEL: 44-20-88699864

フランス Paris

TEL: 33-1-45860312

ドイツ Hamburg

TEL: 49 (40) 388439

オランダ Amsterdam

TEL: 31-629-577511

スウェーデン Goteborg

TEL: 46-31-227883

オーストリア Vienna

TEL: 43-1-7346988

南アフリカ Gauteng

TEL: 27-11-4503365

中国蘇州

TEL: 86-512-80990980

ベトナム Hochiminh

TEL: 84-8-38535001

ミャンマー Yangon

TEL: 95-1-541494

マレーシア

セラランゴール支部 KL
TEL: 603-62563800

ペナン支部 Penang

TEL: 604-2281013

シンガポール

TEL: 65-65829958

インドネシア Jakarta

TEL: 62-21-5055999

大愛テレビ局

TEL: 62-21-50558889

スリランカ Hambantota

TEL: 94 (0) 472256422

ヨルダン Amman

TEL: 962-6-5817305

トルコ Istanbul

TEL: 90-212-4225802

オーストラリア Sydney

TEL: 61-2-98747666

ニュージーランド

Auckland
TEL: 64-9-2716976

慈済

2024年5月20日発行・329号

中華郵政台北誌字第909號執照登記為雜誌交寄

Printed In Taiwan

発行人 釋證嚴

発行所 慈済基金会

〒112 台湾台北市北投区立德路8号

編集 慈済日本語翻訳チーム

杜張瑤珍・陳植英・黒川章子・王麗雪

電話 (886)02-2898-9000

FAX (886)02-2898-9994

E-mail: 021620@daaitv.com

慈済基金会日本支部

〒169-0072 東京都新宿区大久保 1-2-16

電話 (03)3203-5651 ~ 5653

FAX (03)3203-5674

E-mail: jptzuchi@yahoo.com.tw

tzuchi@tzuchi.jp

證嚴法師のお言葉、委員や会員の体験談、慈済に関するニュース等を日本の方々にお知らせする目的でこの小冊子を編集しました。日本語への翻訳は素人である私たちがしましたので、不備な点や、つたないところがあると思います。ご感想やご教示をいただければ幸いに存じます。(日文組編集同人)



0403台湾 花蓮地震

花蓮市にある天王星ビルは4月3日の強い地震で傾き、捜索救助隊員が到着した。(撮影・羅明道)

地震の後、台湾全土で100棟以上の建物に赤（危険）や黄色（要注意）の紙が貼られた。甚大被災地の花蓮では、慈済が公共機関と協力して第一線の救助人員のニーズに合わせて支援し、避難所の設置を効率よく行った。そして、地震発生から24時間以内に1回目のお見舞金が届けられ、4月半ばまでに1400世帯余りに配付を終えた。続いて家屋の修繕に着手し、被災者の心身を落ち着かせた。



慈済日本サイト



慈済ものがたり